

年頭の所感

市長

まず、元日に発生した北陸、能登半島地震でお亡くなりになられた方々に、衷心より哀悼の意を表しますとともに、被害にあわれた方々へ、心からのお見舞いを申し上げます。
横須賀市においても発災当日から、消防局を中心に災害派遣準備を進めており、要請が入り次第、いつでも即応できる体制となっております。
現地では現在でも、懸命の救助活動が行われています。
一刻も早い救助と、一日も早い市民生活の復旧、復興を、心より祈念するものであります。

改めまして、皆さん、新年あけましておめでとうございます。
今年もよろしく願いいたします。
2024年、令和6年の年頭の所感をお伝えいたします。

昨年を振り返りますと、やはりまずは、新型コロナウイルスですが、ようやく、昨年5月に、感染症法上の扱いが5類となり、日常が戻ってまいりました。
これはすべて、これまで市民の皆様から頂いた、大変多くのご理解、ご協力のおかげであり、まずは深く感謝を申し上げたいと思います。
特に、最前線で危機対応に従事していただいた、医療・福祉関係をはじめ、エッセンシャルワーカーと称される方々には、大変なご尽力をいただきました。
改めまして、心からの御礼を申し上げたいと思います。

さて、昨年、私は、「顕」という漢字を掲げ、市政に取り組んで参りました。
これは、コロナ禍においても、横須賀で生まれた新しい流れが、皆様の目に見える形で顕れ、日々、横須賀市が、着実に前進していると感じていただきたいという思いからです。
実際、昨年はまず4月に、長井海の手公園ソレイユの丘が「365日、誰もが遊び楽しみ尽くせる」をコンセプトに、リニューアルオープンしました。
続いて6月には、横浜F・マリノスの練習場が、久里浜に完成したことに加え、スポーツではBMXやダンス、そして新たにパルクール日本一決定戦を、三笠公園にて初めて開催することができました。
また、音楽・エンターテイメントでは、「街はどこでも小劇場」をモットーにJAZZ ROCK FESTIVALを開催するなど、街を音楽であふれさせるとともに、メタバースヨコスカのサイトを開設し、仮想空間からでも、横須賀を楽しんでもらえるようになりました。
今後も、こうした、横須賀ならではの取り組みをますます深化させ、市内外の多くの方々に、横須賀の街の魅力を、感じていただき、横須賀と関係する人、交流する人を、更に増やしていきたいと思っています。
一方では、人口減少社会を見据え、DXの一環として、「ChatGPT」を全国に先駆けて導入しました。これは、市民サービスの維持、向上のため、機械に任せられることができる仕事は機械に任せ、職員は、人にしかできない仕事に、傾注をしていこうとするものです。
また、今年より、民生局を中心に「18歳までの医療費助成」や「すべての行政センターでの、生

活相談窓口」など、ゆりかごから墓場まで、それぞれの生活やライフステージに合わせ、必要な時に、必要な方に、確実に行政が寄り添うことができるよう、様々な施策を、開始いたしました。さらに今月からは、パートナーシップ宣誓証明制度に続き、ファミリーシップ制度を導入し、多様性を当たり前のものとしてとらえ、それまでの社会システムや法令にとらわれず、誰もが安心して、生活していけるための取り組みを進めます。

常に申し上げてきていることではありますが、自治体行政の最終目的は福祉の充実であり、その目指すべき姿が、横須賀で暮らすすべての人々が多様性を認め合い、誰もが手を取り合って、慈しみあい助け合うことのできる、「だれも一人にさせないまち」であります。

これまでにお伝えしてきた数々の施策は、すべてこの目的のために取れんされるものであり、是非、今年は、それぞれの施策が「だれも一人にさせないまち」への確かな推進力として、更に大きく発展させることができるよう、引き続き、全身全霊で取り組んでいく所存です。

そこで私は今年の漢字として「風」を選びました。

この三年間、社会は大きく変わりました。

コロナ禍の当初は、まさに未知の感染症との闘いであり、明日がどうなってしまうのか、全く予想ができない日々が続きました。

学校では、教室での授業が行えず、運動会や文化祭、卒業式などの行事も中止となり、私たちは三年間、本当に多くのものを犠牲にしてきました。

ただ、どのような時であっても、知恵と心を寄せ合い、その時にできることを、ひとつずつ着実に行ってきました。

その結果、横須賀市は、むしろその変化を力に変え、新しい多くの流れを、呼び込むことができたと思っています。

嵐の中でも確実にまいてきた種が芽を出し、花を咲かせ、実を結び、ようやく果実として、姿が見えるようになってきたと感じています。

今年は、これまでに呼び込んだ新しい流れから、どこよりも大きな風を巻き起こし、その風に乗って、横須賀の、更なる未来を切り開いていく決意を、年頭の所感として、お伝えしたいと思います。

今年も、引き続き、よろしくお願いいいたします。

以上です。

■質疑応答

記者

冒頭にありました石川県への派遣については、規模であるとか、要請によってだとは思いますが、どのような準備をしていますか。

市長室長

現在、厚生労働省から保健師2名を派遣できないかということと、また家屋の危険度を判定する応急危険度判定士の広域派遣の要請が入っています。

いずれも、横須賀市は派遣できるという回答をしています。

記者

消防士の派遣依頼はありますか。

市長

今のところ消防士はありません。

記者

話は変わりますが、今年の漢字は「風」というお話がありました。市長が、今年一年で一番期待している施策や一歩先に進むために手掛けていきたい施策はありますか。

市長

観光において誘客が増えるということ。横須賀が良いまちであるということをも日本中、いや世界のみなさんに認識していただきたい、風を起こしたい、という意味での「風」でもあります。

ただ、石川県で災害があり、この三が日、いろいろと考えてしまったのですが、今回の災害のようなことではなく、違った意味で風を吹かせていきたいと思っています。

石川県の震災があつて考えたことがあります。三浦半島は陸の孤島になる可能性が高い。ご承知の通り横須賀へ繋がる道路は2本の国道と横浜横須賀道路しかありません。横浜横須賀道路が無かった時代は北へ通じる道は国道16号のみでした。

海上交通路といつても、能登半島を見ていると道路が寸断されていて海上の交通路がほとんど機能していません。横須賀市が陸の孤島となる可能性が十分にあるということをも、私は以前から申し上げていました。

こういった災害にあつたときに、横須賀はどうあるべきかということをもとても考えさせられました。おそらく空からの輸送手段として、独自で三浦半島広域で、ドローンや災害用ヘリコプターを持たなければならないのではないかと。これは以前から感じていましたが、あらためて能登半島の災害で必要性を感じました。

本日、小泉代議士ともお話をしました。こういった状況だからこそ三浦半島の災害のことを第一に考えていかなければならないとあらためて強く思った3日間でした。

被災地では未だに多くの状況が把握できていませんし、まだわからないことが多いと思いますが、横須賀の場合は崖地が多く、住宅密集地もかなり多い。災害が起きたら果たしてどうなるのかと考えると本当に眠れませんでした。

それを考えたときに、災害用ヘリコプターが必要だと思いました。しかし、30億円もするとのことで、横浜市と川崎市は独自で持っていますが、横須賀市の状況では購入できません。広域で考えて、三浦半島全域で1機持ちたいと思っています。

昨年横須賀市でハイパーレスキュー隊を作りたいと考えていた矢先にこのようなことが起きました。これもまたひとつの風なのかなと思っていますところでした。

嫌なことが続きますと、年頭でおめでとうございませうと言えぬ気分にはなりません。

日本航空の事故で世界から称賛されていますが、客室乗務員たちが機転を利かせて間一髪で1人の犠牲もなく乗客を避難させたことは本当にすごいことだと思っています。

たゆまぬ訓練と危機意識を常に持ち合わせているからこそできたことだと思っています。

今朝、市職員にも伝えましたが、市民の安全安心を守ることは市職員の責務ですから、改めて訓練や心構えをしっかりとしなければならぬと思っています。そして、市民の皆さんにはいつでも災害が起きる可能性がありますので、その心構えはしておいていただきたいと思っています。その上で私たちは全力を挙げて皆さんを支え、助けますという話をしていきたいと考えています。私が視察などで西日本の方と交流すると、地震などの災害に対する危機意識を常に持っていると感じます。それは被害の歴史の中に裏付けられているものであつて、いつ起きてもおかしくないといった臨戦態勢のような心構えを持っていらっしゃると思います。

神奈川や関東に来ると、それがなくなっているように感じます。

特に横須賀のように、大正の大震災の時には被害があつたと思いますが、暖かく自然災害にもほとんど見舞われたことがなく、戦争でも大きな空爆の歴史がなかったということがありますので、ここは平和で安全であるといった、漠然とした意識が強いのではないかと考えています。

過去に被害にあわれた、懇意にしている市長が仰つていましたが、8年間地震がないと人は地震

を忘れてしまうものらしいです。ですので、繰り返し災害について話していかなければならないと思っていた矢先にこういった状況になりましたので、改めて首長の責務として様々な厄害を小さくすることが私に課されたことなのではないかと3日間で感じました。

年頭にあって一番伝えたいことは、様々な仕掛けづくりなどについてお話させていただきましたが、自然豊かな土地であり崖地が多く平地が少なく経済的にもそれほど恵まれている地域ではありませんが、横須賀が注目を浴びていろいろな方たちにお越しいただきたい。

しかしその前に、安全安心のために何ができるのかと考えなければならぬということです。

記者

煮詰まったお話ではないと思いますが、三浦半島でヘリコプターを持つというアイデアはどういった形が考えられますか。

市長

横須賀は丘陵地が多く階段や谷戸ばかりで、陸路からだけでは助けに行くことが難しいことが考えられます。

道路が寸断されたときにそういった場所に行く手段は空からしかないと思っています。

どういう状況かというケーススタディはいろいろとあるのですが、神奈川県中大変な状況となっているときに、自衛隊などに応援を頼むことになるにしろ、横須賀は横須賀の中で助け合わなければならないとなり、崖地の人たちを助けるためにはヘリコプターが必要だと思います。

仮に海があったとしても、道路が寸断されていると救援物資や応援が来ることすら大変です。

三浦半島は半分島の半島ですから、陸の孤島になってしまうので空からしかないだろうと考えたわけです。

先ほどの2市はヘリコプターを持っていますが、災害時には自分のエリアのために使われると思っていますので、三浦半島全体でヘリコプターが必要ではないかと去年から思っていたところです。

そういったことを思っていた矢先に今回の災害がありましたので、できるだけ早くに進めたいと思っています。

記者

市が単独で所有したいという話ですか。それとも三浦半島のいくつかの自治体で所有したいという話ですか。

市長

できれば、横須賀で所有したいと思っています。

ただ、30億円という費用はとてじゃないが単独では出せません。

おそらく消防局から国や県に話をして、補助をしてもらうだとか、そのような話にもなるのではないかと思います。まずは神奈川県全体でこういった状況になるのかといったことを考えなければなりません。

国の動きを見ている、待ってはられないというのが本音です。当事者がなんとか踏ん張らないといけないとつくづく感じました。

記者

2026年を目途に安田造船所が三浦半島にスーパーヨットを構え、マリーナを作るような計画を立てられています。秋谷のあたりには豪邸も多く都内からの移住者がいて、逗子葉山のカルチャーが秋谷にも広がってきているという中で、新しい消費の形や新しい観光といったものを横須賀から発信できるのかなと思いますがいかがでしょうか。

市長

できれば横須賀の西海岸と東海岸を渡っていけるような海路を作っていきたいと思っています。

しかし、行政がどこまでできるのかと考えると、やはり民間事業者の皆さまにおいでいただき、港を使っていくしかない状況です。その意味で、様々な仕掛けづくりをしたので、横須賀の価値が上がってきたのではないかと考えています。

仰るとおり、秋谷や佐島には多くの著名人の方がいらっしゃるのですが、いずれ東海岸と連動し三浦市も含め海路ができて初めて三浦半島海洋都市構想となるのではないかと私が若いころから考えてきたことです。

ようやく、民間事業者の方たちに光を当てていただけるようになったという意味で、できる限り支援をしていきたいと思っています。

記者

任期が残り1年半となり、今年の夏を迎えればあと残り1年となりましたが、3期目に向けたことなど気持ちの中で何かありますか。

市長

もともと全力投球型なので、目の前にあることに全力投球していきたいと思っています。

横須賀を浮かび上がらせたい、今までみたいな状況ではなくて、横須賀の活性化というのは、福祉も含めて、したいという中で、まだまだ道半ばだと思っています。今後将来を見据えて、更に全力を尽くしていきたいと思っています。